すくすく広場令和７年度第１回公開講演会

2025 年 5 月 25 日（日）14:30～16:00

花崎コミュニティセンター

「助けて」と言えるマチへ ～羽生の杜の歩みから～

講師　羽生の杜代表　田村　信征　氏

こんにちは、本日はお招きに預かりましてありがとうございます。すくすく広場は私にとって活動の先輩になります。羽生の杜の活動は後発で、すくすく広場は目標にする団体の一つでした。戸恒さんとのおつきあいの結果この場があると理解しています。戸恒さんがお亡くなりになってすでに５カ月が経ってしまいましたが、存命中は週に 1,2 度ランチを３年ぐらい継続していました。「よくそんな話す内容があるね!」と言われてましたが、お互いタバコを吸う身で肩身の狭い思いをしながら加須市役所の近くにあるホワイトハウス（勝手に名前を付けていた壁の白いカフェ）等数件を巡ってランチをしておりました。ここでの話しはこの当時からにわかに立ち上がってきた子ども食堂、プレイパーク、フードパントリーなどやネットワークの話、そして自団体の活動など尽きることがなかったように思います。

戸恒さんとの出会いは、埼玉県主催の法人向けの会計処理についての会合で春日部会場で会ったのが最初です。たまたま隣席で名刺交換したのが羽生に来て間もないころですが、その時以来のお付き合いになります。

私どもの法人は 2014 年に羽生の杜を立ち上げました。そして 2019 年末頃からコロナが始まりました。当時の上田知事は「小学校区に一つ子ども食堂を立ち上げる」と。羽生の杜が（一社）埼玉子ども食堂ネットワークに入会したのは 30 番目前後だったと思います。現在は約 240 団体が所属しております。この 4,5 年間に急増してきたと言えます。他の都県に比べて埼玉県は行政の力の入れ方が違います。コロナ禍の中で、埼玉県東部・埼北エリア（一般社団法人埼玉県子ども食堂ネットワークではこのエリアを第７エリアと呼んでます）で羽生の杜は建物と土地を持っているということもあり、支援物資が運ばれてくる拠点になってました。このエリアには現在約 30 数団体が子どもの居場所を提供する活動を展開しております。コロナ禍以降加速度的に居場所が増えてきてそれに伴ってさまざまな課題も出てくるのですが、第 7 エリアのキャプテンが戸恒さん。サブキャプテンが田村だったこともあり、いろいろ話し合うことが多くあったとも言えます。

私は 2014 年に羽生市に越してきましたがそれまでは東京在住、ここ羽生市は全く未知の土地でした。羽生の杜には理事が 10 人いますが、9 人は全国に散らばっています。身近に相談できる人はいませんでした。羽生は元々地縁・血縁の強い地域のような感じがします。人との関わりもゼロからの開発になりました。そんな状況の中で戸恒さんに出会い僕にとってはただ一人の相談相手になっていきます。

僕は東京在住のころを含めて福祉に関わることを主としてはやってきませんでした。戸恒さんとは話すことが一杯あったのです。お互いに意見を戦わせていたこともありました。戸恒さんはすくすくの事務局長でしたのですくすくの話はたくさん聞

かされておりましたし、そのうち私もすくすくの会員となり「すくすくサロン」には相当参加させていただきました。羽生の杜が何か新しいことを始めるときには必ず相談にのってもらうのですが彼の「いいんじゃない」という後押しとノリでやってきたように思います。

埼玉県内で 2 番目のコミュニティーフリッジ（365 日・24 時間対応・無人の食糧支援のプラットホーム）立ち上げも財政的・人的課題はたくさんありましたが、彼が背中を押し、多くの実質上の支援のお陰で立ち上げることが出来たと感謝してます。

改めて自己紹介します。もうすぐ 82 歳です。北海道の岩内町出身です。ご存じの方も多いと思いますが泊村、最近再稼働が承認された原発がある南隣の町です。小樽のちょっと南になります。私の妻は若いころから反原発運動に長いこと関わってましたが、僕の故郷の隣にできたこの泊原発には抗議活動で僕以上に行っておりました。原発は仮に廃炉になっても核のごみの処分ができていないのです。何十年もかけても六ケ所村の廃炉もできていない。原発イコール核のごみ処理問題。どこかに作らなければならないわけです。岩内の南の隣町寿都町がごみ処理施設を作ろうと手を挙げております。そして泊村の北の隣村の神恵内村もごみ処理工場に手を挙げているのです。つまり、積丹半島の根元にある私の故郷岩内町はその中心に位置する町でもあります。要するにこの一帯が一大原発村になるという可能性があるということです。国は最も貧しい土地を狙い撃ちにして原発を持ってくるのです。岩内も昔はニシンで栄えた町でしたが、今やその第一次産業の漁業も全く廃れてしまい寂しい町になっております。

僕は高校までこの岩内で生活しました。3 歳で父親が他界して樺太から母と 2 人で引き上げてきました。母は私が小学校 4 年生になったころに側索性筋萎縮硬化症（筋ジストロフィー）と診断され 1 級の身体障碍手帳を持つことになります。母一人、子一人の母子家庭、障碍者家庭、生活保護受給家庭となります。当時は生活保護家庭の子は昼間の高校に進学することが叶わず、定時制高校しか認められませんでした。どうしても昼間の高校に行きたければ生活保護から外されてしまいます。私は中学から高卒まで 6 年間続けた新聞配達、中学生への家庭教師と奨学金とで、生活保護を受給しないで昼間の高校を選択しました。母親は身体障碍ですから家事などもほとんどできなかったため、家事万端をこなしながら今でいうところのヤングケアラーとして小学 4 年から高校までを田舎で過ごしたことになります。

高校卒業後に牧師になる志を持ち母親と一緒に岩内を引き払い母は千葉の障碍者施設に入所し、私は東京の神学校に 5 年間通い 23 歳で卒業して日本基督教団の牧師になります。牧師になって間もなく 1970 年の大阪万博が開催されました。ここにキリスト教館を建てることになりそれに反対して反万博のデモに参加したりしておりました。キリスト教の「伝道」の在り方を根本から問う運動でもありました。このことがきっかけになり、牧師で飯を食う坊主の生き方から決別し、生業は別の所から得るという二足の草鞋を履くことになり現在に至っております。７０歳で羽生へ越してきて現在は羽生の杜の仕事が全てです。年金生活者ですが、生きづらさを抱えた何か困っている人への支援に全力を傾けています。やってもやっても仕事は終わらな

い。ここ数年が８０年の人生で一番忙しい生活かも知れません。実は二足の草鞋に至った話というのは、この話だけで何時間もかかる私にとっての人生の転換点でもありましたのですが、ここでは端折らせていただきます。

現在の羽生の杜について、話をさせていただきます。月二回の「みんなの食堂」を開催。今日もその日でしたが準備開始の 8 時からお弁当配付の午後 2 時まで活動します。毎回 120 食から 140 食の弁当を配布しております。これでも、羽生市内にある他の 2 か所の「子ども食堂」と比べた場合相当少ない数になります。あとにできた団体は 170 食から 200 食近くやっていて数が多いです。200 食近くやっているのは「すごいなあ」と思います。

私は「埼玉県の子どもの居場所アドバイザー」をやっています。戸恒さんもやっておられました。県内のどこかで子ども食堂が立ち上がる時にアドバイザーとして関わるという役割です。これにはわずかですが県から謝礼が出ています。こういう形で県行政として力を入れている。助成金や企業との結び付け等相当なことを県はやってくれていて支援を受けているということです。私はアドバイザーという立場からだけでなく市内の子ども食堂の立ち上げにはすべてに関わっており、開催後も出来るだけそれらの食堂にも訪問するように心がけております。

月一回開催している団体さんが 3 団体、羽生の杜は月に 2 回開催しておりますから全ての子ども食堂を利用することで最大 5 回食堂に通えることになります。そのように利用者さんに積極的に進めており、ダブルあるいはトリプルで利用されている方は相当数おります。これは羽生市の特徴かもしれません。利用したい人は全てに行ってくださいと勧めているのです。4 月からもう一か所子ども食堂が出来たので希望すれば 6 回の利用ができるようになりました。

羽生の杜の「みんなの食堂」は残念なことに十分な子どもたちの居場所になっているとは言えません。食卓を囲む「みんなの食堂」からコロナ禍以降お弁当を渡すようになってから、なかなか元のように食卓を囲む「みんなの食堂」になっておりません。利用する方々もそれに慣れてきた。受け取って帰ることに満足しています。「寂しいな」と思います。子ども食堂が安い弁当屋さんになっていることを検証する必要があると考えてます。

羽生の杜の場合コロナ禍以降の傾向としてフードパントリーと子ども食堂を利用する方が重なっています。つまり経済的に厳しい家庭が圧倒的に多く利用しているということです。これは他の団体（200 食くらいを提供している）との違いでもあります。今日もボランティアさんは 10 人ぐらい、少ないときは 4,5 人です。他のところは多いです。僕は地元の人間でないこともあり元々の知り合いは地元におりません。活動の中で知り合いになった方々ばかりですから、ボランティアの数は圧倒的に少ない状況です。

第二の活動として、フードパントリーを、偶数月の第 3 土曜日に行ってます。1 世帯平均が 3 人家族なので 75 世帯で約 240 人になります。羽生市内ではキャロットさんが 40～45 世帯、うちが 75 世帯、併せて 120 世帯になります。会場はキャロット

も羽生の杜を使っていただきます。ですから私は両団体のパントリー利用者とすっかり親しい関係になっております。羽生市人口は 54,000 人。ひとり親家庭は約 400 世帯になりますのでひとり親家庭全体の 1/4 をカバーしています。この比率は県内では相当に高い水準かトップではないかと思います。

この活動を開始するにあたり社協に行って、経済的に困っているひとり親家庭や生活保護を受けている家庭に食糧支援したいと相談に行きました。私どもとしては困っている家庭にリーチする手立てがなかったからです。驚いたのは行政サイドとして生活保護受けている人にはパントリー利用は必要ありませんというものでした。何故ならば生活保護法に基づいて行政が最低限の保証をして支えているからですという理由です。これには本当に驚きましたというよりは怒りがこみ上げてきました。生活保護での救済は「最低限」で線引きされております。普通に安心して生活できる保障でないことは経験上十分すぎるほどわかっておりましたので、この行政の姿勢にはびっくです。結果的にはひとり親家庭に対してチラシを入れていただいて利用者募集をすることになりました。それで申し込んできたのが 70 世帯ありました。キャロットさんも同じように市役所に行ってチラシを入れてもらいます。

埼玉県内でフードパントリー活動を実施している団体は約 75 団体あります。この 75 団体で NPO 法人化（特定非営利活動法人埼玉フードパントリーネットワーク）して様々な課題を共有し、企業などの食材支援の受け皿としての活動を展開しております。私はその法人の専務理事及び広報部長としての役割も担っております。みなさんのお手元に渡っている「ニュースレター」も広報活動の一環で年 2 回発行しております。また、県内には先ほど申し上げましたが「一般社団法人埼玉県子ども食堂ネットワーク」もあり、240 団体が所属しております。このように役割別にネットワーク化されしかも法人化されているのも埼玉県の進んでいるところと言えます。

子ども食堂にしてもフードパントリーの活動にしても現在の日本の格差社会を目の当たりにできる「窓」になっていると思われます。ひとり親家庭の 9 割はシングルマザーです。シングルファザーもいますが両者とも特に子育てが大変です。シングルの家庭は総じて圧倒的に経済的に厳しい家庭が多いです。不登校児を抱える家も多いです。メンタルが病んでいる親御さんもいます。離婚が成立していない家庭もいます。ひとり親と未婚子、ヤングケアラーの家庭もいます。パントリー利用時の登録で家族構成などはほぼ把握できますが内情はなかなかすぐには分からないです。パントリーは 6 年目、子ども食堂は 7 年目、ようやくその方々と慣れ親しんできたと思います。

こちらから「困ってますか」とは絶対に言えません。しかしながら、何かを言ってきたときには全面的に受け入れます。長い間には少しずつ分かってきます。夏休みの遊びの様子や親の対応によって状況が分かることもあるものです。パントリーの前に何軒からの家庭からお米がなくなったので何とかならないかなどの電話が来ることが多いのです。そして市や社協からも電話があって、お米とかレトルト食品など渡してもらえないかという依頼もあります。社協さんにしても月に一度しか支援できないから、二回以上になるとこちらに言ってくる。パントリーを利用する家庭は今の社会の実相を必ず反映していると、実感として受け止めてきました。

実はそれほどに大変な困難を、民間ボランティアが対応できる問題ではないんです。子ども食堂やフードパントリー、学習支援が必要なくなる行政のセイフティーネットがなければならないんです。公助、共助、自助が真逆の状態になっているとしか思えません。受給者は非正規労働者が圧倒的に多いのです。そのような方々にとって平日に受け取りに来られないことは当然ですが、土、日にも来られないこともある。つまり非正規のパートタイムの勤務ではこちらの実施日に合わせることが出来ない方々は当たり前に大勢いるということです。75 世帯の内の約 15 世帯前後は何らかの理由（仕事や体調不良、子どもの病気などなど）でその日に引き取りに来ることが出来ません。前日までは食料集めに奔走、当日は配布、その日に来られない家庭については都合の良い日時を聞いて出来るだけその事情に合わせてお渡しするとか届けるなどの対応が毎回必要です。

フードパントリー活動を実施することにおいても準備段階が大変です。食糧などの支援物資の引き取りや仕分け作業がありますので家族数に対応して支援物資を出来るだけ平等に仕分けするようにします。冷凍食品などがある場合は保冷バックや保冷剤を持ってきてもらうように指示し、当日に冷凍庫から直接出してお渡しするようにします。ご支援いただく食材にしても開催日と賞味期限なども考慮しながら準備をすることになります。フードパントリー活動の 30％はナンチャッテ運送屋であったり、ナンチャッテ物流倉庫屋さんの仕事のようなものです。

第三の羽生の杜の活動はコミュニティフリッジです。

この事業は 2024 年 10 月に開始ししたばかりです。この活動まだ日本社会において一般的に知れ渡っている活動とは言えません。分かりやすく言えば、365 日 24 時無償で利用できる無人のコンビニエンスです。

何故、このようなコミュニティーフリッジを始めるに至ったのか？このことについて話をさせていただきます。フードパントリーの活動のところで触れましたが、開催日当日に来れない方が約 20 パーセント居ります。その理由は仕事の関係や体調など様々ありますが、このことは、ひとり親の置かれている状況から固有に発生する理由が多いということです。もう一つ大きな見逃すことが出来ない理由があります。本当は利用したいけど他人と会いたくない人、本当に困っているけど「助けて！」と声を出すことが出来ない、あるいは声を出しづらい人がいるということです。フードパントリーを利用されている方の中にもたくさん問題を抱え悩んでいる方々はおられます。何とかフードパントリーを利用して「ありがとう！」と笑顔で挨拶してくださいます。そんな時、「ああ、やっていてよかった！」と素直に実感します。しかし、そのような声を出せない方がさらに底に居るということなのです。このような方々にとってコミュニティフリッジは無人（誰かに会わなくて済む）で、時間を選ばなくて済む（自分の都合で利用可能）ことなど、最初の登録さえ出来ていれば欲しいときに取りに来ることが出来る年中無休の食糧支援システムです。

このシステムを開発したのは岡山の法人さんです。2 回ほど岡山に出向いて見学と勉強をさせていただきました。そのうちの一回は戸恒さんも同行してくださいました。立ち上げるのには 2 年間の準備期間を要しました。建物（プレハブ 2 棟を繋ぎ

合わせる)、駐車場敷地の整備、業務用大型冷凍、冷蔵庫の購入等約 8 百万の開設資金が必要でした。その半分をご支援いただいた篤志家さんがいらっしゃいました。その半分を基に多くの方々の寄付がプラスされて実現したプロジェクトでした。本当に感謝に堪えません。発想から 2 年ほどの準備を経て昨年の 10 月 1 日に立ち上げましたのです。

オープニングには 50 人以上の方がお集まりいただき、このシステムについてのプレゼンテーションと現場見学を行いました。埼玉県福祉部子育て支援課、埼玉県社会福祉協議会、羽生市長、羽生市議会副議長、羽生市福祉課、羽生市社会福祉協議会など多くの行政関係者様に参列いただきました。また NPO 法人埼玉フードパントリーネットワーク、(一社) 埼玉県子ども食堂ネットワークの法人代表や関係した多くの方々、そして朝日、読売、東京、埼玉、埼東よみうり新聞の各記者などが取材をして埼玉版に記事掲載をしてくださいました。このような大掛かりな仕掛けを実行した理由はそれなりにあります。先ずはコミュニティフリッジはほとんど世の中で知られていないということがあります。国内では 15 か所 (当時、現在は 20 ヶ所)、埼玉県内では草加市に次いで羽生の杜の 2 か所のみです。私の予想ではこのシステムはおそらく何年も先にはフードパントリーよりも拡がっていると思われます。子ども食堂やフードパントリーをやってきた中で対応できない人々、頼りたくても頼れない人にアウトリーチをかけることが出来るシステムです。

桐生市事件をご存じだったでしょうか。生活保護を出したくない最悪の事例事件です。何が最低限の生活なのか・・・。私自身が生活保護を受けていましたので行政窓口の対応はとてもよく経験もし嫌な思いをさせられてきた思いがあります。一番いやだったのは、民生委員は家に来て、贅沢品はここにはないか。これは何ですか。それがいやだった。母一人子一人の家庭でした。母は身体障害者です。特別奨学金制度を (試験を受けます) を受けました。それ以外に家庭教師や新聞配達で家計を支えてきました。今の行政の、食うだけ、生きるだけの生活保護制度自体を見直す必要があるのですが、国はさらに受給者に厳しい所得の下限を引き下げているのです。桐生市で起きた生活保護に関する事件はその最たる事例と言えます。

フードパントリーの月に一度の支援はひとり親世帯にとって決して十分なものとは言えません。せいぜい一週間持たせるのが良いところです。あとの期間は不足しているんです。民間の活動に依存するようなセーフティネットなどは本来あってはならない活動ではないかと思っております。埼玉県がこのような活動に対して支えようとしていることには感謝しつつも、本来は私どもがやることではなく行政が支えることではないですかと言いたいところなのです。しかし、現時点では到底難しそうですし、現実に困っている方々が存在する以上、このような状況を踏まえてせめて「助けあいのマチ」、「助けてと言えるマチ」、「支えあうマチ」という草の根の「マチオコシ」をこのコミュニティフリッジをプラットホームとして展開したいと思ったのです。マチおこしとして、コミュニティーフリッジをできないか。商工会に所属する市内 1,000 社にご支援いただきたいというチラシを入れていただきました。反応はゼロでした。まあこんなものでしょう。マチオコシは腰を据えてじっくり年月をか

けてやっていくしかありません。幸いインフラは整えたので時間をかけて内実を固めていく積りです。

　無謀な挑戦でもあるのですが、それをやっていることで、長生きできそうな、そんな気がします。亡くなられた戸恒さんが今も背中を押してくれているように感じてます。

　ご清聴ありがとうございました。